紫式部の源氏物語

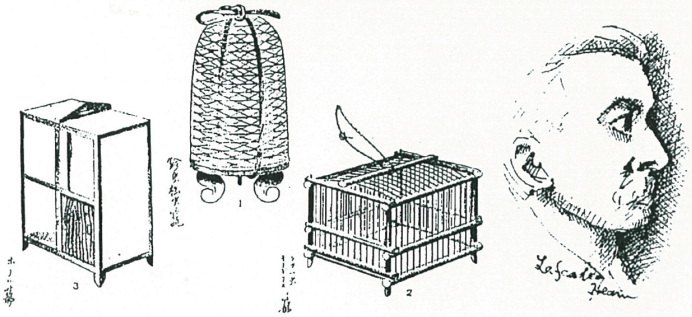
「鈴虫の巻」

「秋の虫のこえはいずれをいずれとも申せませぬ中でも、松虫がすぐれていると仰せになって、いつぞや中宮が遠い野辺からわざわざお捕らせになりまして、お庭へお放しなされたことがありましたが、今もそれと分かるように鳴きつづけているのが、少ないのは、松虫と言うに似合わず、寿命の短いものなのでしょうか。それに、人が思うように聞くことの出来ない山奥や、遙かな野末の松原などで声を惜しまず鳴いているのも、妙に水臭い心を持っている虫ですね。そこに行くと鈴虫は、気軽に何処ででも鳴きますので、当世風なところのあるのが可愛らしゅうおもわれます。」とあります。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

虫の音楽家

「非常に洗練された芸術的な国民の美的生活の文化の中で、鳴く虫の占めている位置は、鳴禽類が西欧文化のなかで占めている位置に比べて、まさるとも劣らない・・・・・・。一〇〇〇年も昔の、世にも珍しい繊細美に富んだ文学が、こんな命短い、可憐な虫を主題にしているなんて、どこの国の人にも想像つくまい。」と叙しています。鳴く虫の音を愛でる、楽しむことは、昔から日本人の生活の中に溶け込んできた生活史でもあり、古今を通していろいろな文学や短詩に取り入れられてきた文学史でもある。日本独特の風流文化が今も根底に流れています。

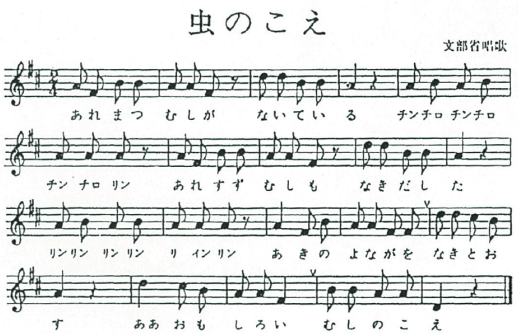


ラフカディオ・ハーン愛用の虫篭（ハーン『虫の楽師』 1898）

文部省唱歌

虫のこえ

一　あれ松虫が鳴いている。
　　ちんちろちんちろ　ちんちろりん。
　　あれ鈴虫も鳴き出した。
　　りんりんりんりん　りいんりん。
　　あきの夜長を鳴き通す
　　ああおもしろい虫のこえ。

二　きりきりきりきり　きりぎりす。
　　がちゃがちゃがちゃがちゃ　くつわ虫。
　　あとから馬追い　追ついて
　　ちょんちょんちょんちょん　すいっちょん。
　　あきの夜長を鳴き通す
　　ああおもしろい虫のこえ。

この歌は、昭和十七年の「初等科音楽」で一度消され、大戦後、昭和二十二年「二年生のおんがく」に復活、採録されました。子どもたちは、リンリン鳴くのは鈴虫で、チンチロリンと鳴くのは松虫という風に心得たものでした。